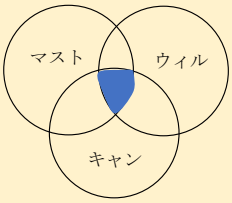
経営が安定し利益と元気が出るホットレター

令和４年４月 15 日発刊・第 64 号

１．仕事の３分類～MUST・WILL・CAN～

一般的に“しごと”は仕事と表記します。「事に仕える」のが仕事です。“事”という漢字の語源を探ると**「神への祈りの言葉を書きつけて木の枝に結びつけたふだを手にした」象形文字**とありました。「神」「祈り」ということから、日本人は古来から仕事を神聖な行為と考えてきたことに納得です。文字遊びをすると“しごと”は**志事**と書けるし、**私事**や**死事**と表記することも可能です。志事は高い志の実現を連想させるので良ですが、私事や死事の範疇になるとこれはＮＧです。この“しごと”をしている者が周囲に悪影響を与えてしまうからです。

さて本稿の標題を［仕事の３分類］としました。私は仕事を**「やらないといけない」「出来ればやりたい」「実施する能力がある」という3つの括り**で分類できるのではないかと考えています。この３つ区分を英語表記すると**MUST・WILL・CANと**なります。この仕事３区分が三重に重なった仕事！、これが着実に成果をあげ続ける仕事となるのです。それでは夫々の仕事の意味を考えてみましょう。



①MUST(マスト)仕事

どんな事業・職務を行っていても必ず発生する仕事です。自分が掲げた目的や目標を実現させるには、絶対にやらないといけない仕事があるのです。この仕事を「自分の仕事ではない」「嫌だ」「難しい」と先送りしたり忌避していると、目的や目標は逃げ水のようにいつまでたっても掴み取ることはできません。

②WILL(ウィル)仕事

「こんな仕事をやってみたい」と思う気持ちは誰でも持っていると思います。一方で社長や上司から「これをやって」と押し付けられた仕事を喜々として行う人は稀でしょう。「それよりもこれをやりたいのに」と内心は不満を持って嫌々ながらやっているはずです。好きな仕事や楽しい仕事、わくわくする仕事では、精神的な疲れは蓄積しません。やり遂げた時の達成感も味あえます。

③CAN(キャン)仕事

好きな仕事を寝食忘れてやっていても、「やり方が分からない」のではこれもまた徒労に終わる可能性が大です。「その仕事を実行するために最低限必要な能力を持っている」ことが必要不可欠です。実行能力もないのに仕事に立ち向かうのでは、時間と労力、資金を無駄遣いしているようなものです。最低限の基礎的知識は絶対に必要です。仕事に取り組む中で経験と知識が複合反応を起こし、能力がぐっと伸長する可能性が高いのです。

以上、仕事の３区分を語ってきました。ＭＵＳＴ等の単円だけでは期待する成果は上がりません。ＷＩＬＬとＣＡＮの二円の重なりでも不十分です。上図のように、**MUST、WILL、CANの3区分(円)が重なった仕事が、会社が希求している仕事の本来の姿**なのです。会社は**社員に「やるべき仕事の意味を説明」し、「その仕事が自身の自己成長に貢献すると」と伝え、「能力向上を図りつつ果敢にトライしよう」と鼓舞激励**して欲しいものです。

２．逆VW思考のすゝめ

トヨタ自動車と車の販売台数世界一を争っている自動車メーカーにVW（ﾌｫﾙｸｽﾜｰｹﾞﾝ）があります。今回はある理由でＶＷの文字を上下逆さにしてみようという提案です。ここで企業力分析に焦点をあててみます。**企業力はマネジメント力、マーケティング力、人財力、商品開発力、生産性、財務力、知的財産力等々多様な力(パワー)が複合的多岐的に絡み合って構成されています。**この企業力の各構成要因の基幹が他社と比較して飛び抜けていれば、余程の環境条件の大激変がない限り、未来に向けて会社が勝ち残ることは可能です。

荒れる大海を進む船の船員達の力量は夫々に高低があり、これらを連結する船長の指導力も不十分だと座礁危険性がぐっと高まります。船長や船員達に求められるのは、**荒海でも自船を前へ進めることができる一定水準の能力**です。**幾つかの尖がった力(パワー)も複数保有**する必要があります。尖がった力は 3～5 つは必要です。ＶＷの文字を反転すると∧ Ｍとなり３つの山を発見できます。底辺もＶＷより安定します。∧ Ｍの底辺は業界水準以上であることを意味します。標題の**“逆VW思考のすゝめ”とは、他者と比較して３つ以上の極めて高い能力、スキル、パワーを持とう**という提案なのです。ＶＵＣＡの現在、会社経営を安定させるには尖がった部分が２つ以内では勝ち続けることは困難です。自社の**尖がった能力等は何か、そしてその尖がった部分を更にブラッシュアップし続け、競争相手に同走を許さない断トツ一番の地位の奪取に挑戦**してみて下さい。

３．２冊の本から学んだ“社会的発明”という発想

［LIFE SHIFT２～100 年時代の行動戦略～］という本を読みました。著者はリンダ・グラットン他１名です。著者は**人生が 100 年という長寿社会でより良く生きる**には、ＩＴ革命等技術的な発明とは別に、**働き方や社会制度などを変革する発明、“社会的発明”が必要**と指摘します。私はこの“社会的発明”という新語にガツンと頭を叩かれました。**発明と呼ぶ位に従来の生き方、過ごし方を変える必要が今！、求められている**のです。

東大大学院の柳川範之教授の［日本成長戦略 40 歳定年制］という本も面白いです。法令により定年を定めるときは 60 歳以上でないといけません。それを 40 歳定年制へと柳川教授は訴えています。これも LIFE・SHIFT２と根底では同じ発想なのです。「40 歳までの 20 年」「続く 60 歳までの 20 年」「最後は 75 歳までの 15 年間」、各**フェーズ別に「自分はどの様な働き方をし職業人生を送りたいのか。私生活とのバランスは？」等、20 年の区切りを設けることで見直しできると主張**します。40 歳到達時に「このまま会社に残る」のも良し、「学び直しで別の業界で頑張ってみる」のもあり。「自営業者として独立」というのも結構。60 歳定年（継続雇用で 65 歳）で安穏とした職業人生を送っていては世界では勝ち残れません。**ワークとライフとの革命的な発想、発明が働き手と企業の両者を活性化**させると教授は訴えています。

〒870-0851 大分市大石町 5-3 メゾン荏隈 101　中小企業診断士・特定社会保険労務士・行政書士・１級ＦＰ技能士清成真一事務所
（月刊誌「おおいたの経済と経営（大銀経済経営研究所様発刊）」に「社長の知恵袋」を毎月投稿しています）